**教科書との対応（中学一年）**

三省堂『現代の国語1』p.134～137（故事成語――矛盾） 光村図書『国語1』p.170～174（今に生きる言葉）
東京書籍『新編 新しい国語1』p.156～（矛盾） 教育出版『伝え合う言葉 中学国語1』p.128～132（故事成語）

**次の文章は、『韓非子』にある話を書き下し文にしたものである。読んで、あとの問いに答えなさい。（①～⑤は文の番号）**

①楚人に盾と矛とを鬻ぐ者有り。②之を誉めて曰はく、1「吾が盾の堅きこと、能く陥すもの莫きなり。」と。③又其の矛を誉めて曰はく、「吾が矛の利なること、2物に於いて陥さざる無きなり。」と。④或ひと曰はく、3「子の矛を以て、子の盾を陥さば何如。」と。⑤4其の人応ふること能はざるなり。

（注）楚＝昔の中国の国の名。 鬻ぐ＝売る。 誉めて＝ほめて。 堅き＝かたい。 陥す＝突き通す。 利なる＝するどい。 応ふ＝答える。 能はざるなり＝できなかった。

（『韓非子』による）

**問一** 本文には、会話（人が言ったことば）が三つある。それぞれだれのことばか。最も適切な組み合わせを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ②鬻ぐ者 ③鬻ぐ者 ④或ひと　イ ②鬻ぐ者 ③或ひと ④鬻ぐ者
ウ ②或ひと ③鬻ぐ者 ④或ひと　エ ②或ひと ③或ひと ④鬻ぐ者

[　　]

**問二** ①の白文「楚人有鬻盾与矛者」の返り点として正しいものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 楚人有鬻盾与矛者（下二・一レ・上）
イ 楚人有鬻盾与矛者（二・一）
ウ 楚人有鬻盾与矛者（下二・一上）
エ 楚人有鬻盾与矛者（レ・レ・レ）

[　　]

**問三** 1で、鬻ぐ者は盾のどのような点をじまんしているか。最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どんな物でも突き通すほど、するどいこと。
イ どんな物にも突き通されないほど、かたいこと。
ウ 軽くて、だれでもかんたんに持てること。
エ 矛といっしょに使うと、とても強いこと。

[　　]

**問四** 2「物に於いて陥さざる無きなり」は、白文では「於物無不陥也」となる。書き下し文の読み方になるように、次の白文に返り点をつけなさい。（送り仮名はつけなくてよい）

於 物 無 不 陥 也

**問五** 2「物に於いて陥さざる無きなり」の意味を、「～ないものはない」という打ち消しの形を使わずに、十字以内の現代語で書きなさい。

**問六** 3を現代語に訳しなさい。（「子」「以て」「陥さば」「何如」の意味がわかるように、二十字以上、三十字以内で書くこと）

**問七** 4「其の人」とはだれか。①の文から八字で抜き出しなさい。

**問八** ④の問いに、鬻ぐ者が次のａ・ｂのように答えたとすると、①～③のどの文のじまんがうそになるか。それぞれ文の番号で答えなさい。

ａ「矛は盾を突き通します。」　ｂ「矛は盾を突き通せません。」

ａ

ｂ

**問九** ⑤「其の人応ふること能はざるなり」とあるが、その人が答えられなかったのはなぜか。「盾」「矛」という二つのことばを使って、三十字以上、四十字以内で書きなさい。

**問十** ②「能く陥すもの莫きなり」は、白文では「莫能陥也」となる。返り点のつけ方として正しいものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 莫能陥也　イ 莫能陥也　ウ 莫能陥也　エ 莫能陥也

**問十一** 次の兄のことばのうち、つじつまが合わない（矛盾している）のはどれとどれか。記号で答えなさい。

ア「ぼくは、家族のだれよりも早起きが得意なんだ。」　イ「早起きのこつは、前の日に早くねることだよ。」　ウ「今朝も、お母さんに三回起こされて、やっと起きたよ。」　エ「朝は、時間を有効に使えるからね。」

と

**問十二** この話から生まれた故事成語「矛盾」の意味を、話の内容にふれて、三十字以上、四十字以内で説明しなさい。

**問十三** 「矛盾」ということばを使って、あなたの生活の中で起こりそうな場面を表す文を、三十字以上、四十字以内で書きなさい。（「矛盾」の字数もふくむ）

# 解答と解説

## 故事成語 標準① 矛盾（韓非子）内容・記述・テストの形

### 内容の読み取り

**問一** ア

【根拠】②・③は「之を誉めて曰はく」「其の矛を誉めて曰はく」、④は「或ひと曰はく」。【読み方】「曰はく（言うことには）」が会話の始まりの目印。その前に書かれている人が話し手になる。②・③は主語が書かれていないが、①の「鬻ぐ者」が続けて話している（自分の売り物をほめている）。④で初めて「或ひと」という別の人が出てくる。【まちがえやすい点】イ：③も「其の矛を誉めて」なので、売り物をほめる人＝鬻ぐ者。④は「子（あなた）の矛」と相手の持ち物について言っているので、売っている本人のことばではない。

**問二** ア

【根拠】書き下し文「楚人に盾と矛とを鬻ぐ者有り」の読む順は「楚→人→盾→矛→与→鬻→者→有」。【読み方】①「与（と）」は「矛」を読んでから一字上に返るのでレ点。②「鬻」は「与」まで読んでから返るので、「与」に一点、「鬻」に二点（「与」はレ点と一点が重なって一レ点）。③「有」は、一・二点をはさんで「者」まで読んでから返るので、「者」に上点、「有」に下点。一・二点をはさんで返るときは上・下点を使う。【まちがえやすい点】イ：「鬻」を「盾」より先に読み、「盾→与→矛」もそのままの順になる。ウ：「盾→与→矛」の順になり、「盾と矛を」としか読めない。書き下し文の「盾と矛とを」の二つめの「と」が「与」にあたるので、「与」は「矛」のあとに読む（レ点で返る）。エ：「盾→鬻→有」と返ってしまい、「矛」を読む前に「有」を読むことになる。

**問三** イ

【根拠】②「吾が盾の堅きこと、能く陥すもの莫きなり」。【読み方】「堅きこと」は「かたいことといったら」。「能く陥すもの莫きなり」は「突き通すことのできるものはない」。二つを合わせて、「どんな物にも突き通されないほどかたい」となる。【まちがえやすい点】ア：これは③の矛のじまんの内容。盾と矛のじまんを取りちがえない。エ：本文に、盾と矛をいっしょに使う話はない。

**問四** 於物無不陥也（「於」「無」「不」の左下にレ点）

【根拠】書き下し文「物に於いて陥さざる無きなり」の読む順は「物→於→陥→不→無→也」。【読み方】返り点をつける問題は、①書き下し文の順に白文の字に番号をふる（於2・物1・無5・不4・陥3・也6）、②一つ下の字から返るところにレ点、二字以上はなれて返るところに一・二点をつける、の順で考える。「物」を読んでから一つ上の「於」へ、「陥」から一つ上の「不」へ、「不」からさらに一つ上の「無」へと、どれも一字ずつ返るので、レ点を三つつける。「也」は最後に順に読むので返り点はいらない。「於」は置き字になることも多いが、ここでは書き下し文に「於いて」と出てくる（読む字）ので、読む順に入れて返り点をつける。【まちがえやすい点】「無」に二点、「陥」に一点をつけるまちがい。それだと「陥→無」と読んで「不」をとばしてしまう。一字ずつ返るときはレ点。

【訓読文（返り点のみ）】①楚人有鬻盾与矛者。②誉之曰、吾盾之堅、莫能陥也。③又誉其矛曰、吾矛之利、於物無不陥也。④或曰、以子之矛、陥子之盾、何如。⑤其人弗能応也。

**問五**　（例）どんな物でも突き通す

【根拠】③「吾が矛の利なること、物に於いて陥さざる無きなり」。【読み方】「陥さざる（突き通さない）」＋「無き（ものはない）」は、打ち消しが二つ重なった形（二重否定）。打ち消しを二つとも取ると、「（どんな物でも）突き通す」という強い言い切りになる。採点のポイント：①「突き通す」と言い切っている、②「どんな物でも（何でも）」のように、例外がないことを表している。二つそろって正解。【まちがえやすい点】「何も突き通せない」と、打ち消しを一つだけ訳してしまうまちがい。また「物に於いて」を「物の中で」と訳さない。ここは「どんな物に対しても」の意味。

**問六**　（例）あなたの矛で、あなたの盾を突いたら、どうなるのか。

【根拠】④「子の矛を以て、子の盾を陥さば何如」。【読み方】一語ずつ訳してつなぐ。「子」＝あなた（相手を呼ぶことば）、「以て」＝～で（道具を表す）、「陥さば」＝突き通したら（「～ば」は、もし～したらという仮定）、「何如」＝どうなるか。採点のポイント：①「あなたの矛で、あなたの盾を」と、だれの何かがわかる、②「突いたら（突き通したら）」と仮定になっている、③「どうなるか」とたずねている。三つそろって正解。【まちがえやすい点】「子」を「子ども」と訳すまちがい。ここでは、或ひとが鬻ぐ者に向かって「あなた」と呼びかけている。「陥したので」と理由にするのもまちがい（まだ突いていない）。

**問七**　盾と矛とを鬻ぐ者

【根拠】①「楚人に盾と矛とを鬻ぐ者有り」。【読み方】「其の（その）」は、前に出てきた人や物を指す。⑤で答えられなかったのは、④で問いかけられた相手＝盾と矛を売っていた人。指示語の問題は、すぐ前の文から順にさかのぼって、当てはめて意味が通るか確かめる。【まちがえやすい点】「或ひと」と答えるまちがい。或ひとは問いかけた人で、答えられなかった人ではない。「楚人」も鬻ぐ者を指すが、八字の指定に合わない。

**問八**　a　②　　b　③

【根拠】②盾のじまん「能く陥すもの莫きなり」（どんな物にも突き通されない）、③矛のじまん「陥さざる無きなり」（どんな物でも突き通す）。【読み方】それぞれの答えを、じまんの一つずつに当てはめてみる。a：突き通せるなら、「突き通せるものはない」という②の盾のじまんがうそになる。b：突き通せないなら、「どんな物でも突き通す」という③の矛のじまんがうそになる。どちらに答えてもどちらかがうそになるので、鬻ぐ者は答えられなかった。【まちがえやすい点】aとbを逆にするまちがい。「突き通す」と言うと、こわれるのは「盾」のじまんのほう。

**問九**　（例）どう答えても、盾についてのじまんと矛についてのじまんの、どちらかがうそになってしまうから。

【根拠】問八で確かめたように、aと答えれば②が、bと答えれば③がうそになる。【読み方】理由を書く問題は、文末を「～から。」にする。「どちらに答えても困る」という両方の面を一文にまとめる。採点のポイント：①盾のじまんと矛のじまんの二つにふれている、②どちらかが必ずうそになる（つじつまが合わない）と書いている、③文末が「から。」。三つそろって正解、①②の一つだけは部分点。【まちがえやすい点】「矛が盾を突き通せないから」のように一方だけを書くまちがい。また、「はずかしくなったから」など、本文に書かれていない気持ちを理由にしない。

**テストの形**

**問十**　ア

【根拠】書き下し文「能く陥すもの莫きなり」の読む順は「能→陥→莫→也」。【読み方】「莫」は「陥」まで読んでから返る。「莫」と「陥」の間には「能」があり、二字以上はなれているので一・二点を使う。「陥」に一点、「莫」に二点。【まちがえやすい点】イ：レ点が二つだと「陥→能→莫」の順になり、「陥す能はず」のような別の読み方になる。ウ：「陥→能」と読み、「莫」を最初に読んでしまう。エ：「能→莫→陥」の順になり、書き下し文と合わない。

**問十一**　アとウ（順不同）

【根拠】ア「だれよりも早起きが得意」とウ「三回起こされて、やっと起きた」。【読み方】「矛盾」は、二つのことがらのつじつまが合わないこと。一つずつ読むとおかしくなくても、二つを並べるとどちらかがうそになる組み合わせをさがす。早起きが得意なら、何度も起こされるはずがない。【まちがえやすい点】イやエは早起きについての考えで、アともウとも両立する。「おかしな文」を一つさがすのではなく、「二つを組み合わせると成り立たない」組をさがす。

**問十二**　（例）盾と矛のじまんが同時に成り立たなかったように、二つのことのつじつまが合わないこと。

【根拠】②・③のじまんが、④の問いで同時には成り立たないことがわかり、⑤答えられなかった。【読み方】故事成語の意味を説明する問題は、「もとの話（何がどうだったか）」＋「今の意味」の二つを書く。採点のポイント：①盾（何も通さない）と矛（何でも通す）のじまんが両立しなかったという話にふれている、②「つじつまが合わないこと」という意味を書いている。二つそろって正解、②だけは部分点。【まちがえやすい点】「矛と盾で戦うこと」「強い者どうしの争い」などとしないこと。この話では、実際に矛で盾を突いてはいない。

**問十三**　（例）ゲームは一日一時間と決めたのに、毎日三時間遊ぶのは矛盾している。

【根拠】「矛盾」＝二つのことがらのつじつまが合わないこと（問十二）。【読み方】例文を作るときは、①つじつまが合わない二つのこと（言ったこと・決めたことと、実際の行動など）を両方書き、②その二つを「矛盾している」でまとめる。採点のポイント：①合わない二つのことが両方書かれている、②「矛盾」の使い方が正しい、③字数。【まちがえやすい点】「兄と矛盾した」「矛盾が強い」など、何と何が合わないのかがわからない文はまちがい。「矛盾」は人と人のけんかではなく、ことがらどうしが合わないことに使う。

【定期テストでよく出る形】

・会話文の始まり（「曰はく」）と終わり（「と」）、それぞれの話し手。

・二重否定「陥さざる無し」の意味。

・「子」＝あなた、「何如」＝どうなるか、「能はず」＝できない、「鬻ぐ」＝売る、などの語の意味。

・返り点（レ点・一二点・上下点）のつけ方と、書き下し文への直し方。

・商人が答えられなかった理由と、故事成語「矛盾」の意味・使い方。

【現代語訳】①楚の国の人で、盾と矛とを売る者がいた。②（その人が）盾をほめて言うことには、「私の盾のかたいことといったら、突き通せるものはない。」と。③また、その矛をほめて言うことには、「私の矛のするどいことといったら、どんな物でも突き通さないものはない。」と。④ある人が言うことには、「あなたの矛で、あなたの盾を突いたら、どうなるか。」と。⑤その人は答えることができなかった。

【記述問題の書き方】

・理由を問われたら、文末は「～から。」「～ため。」。意味を問われたら「～こと。」で終える。

・指定されたことば（「盾」「矛」など）は、必ずそのまま使う。使ったら印をつけて確かめる。

・「どちらに答えても困る」のように、両方の面がある内容は、一方だけを書かない。

・書いたら字数を数える。句読点も一字に数える。

【もっと知ろう】韓非は、この話を、昔の名君とされる堯と舜の二人を両方ともほめたたえる人々の考えを批判するために使っている。（『韓非子』の原文では、このあとに「夫れ陥すべからざるの盾と、陥さざる無きの矛とは、世を同じくして立つべからず」と続く。）